委託研究２

「山形県小児保健会　委託研究報告書」

1．研究者

山形大学小児科学講座　荻野　大助

2．研究テーマ

小児の検尿で発見された腎疾患についての検討

3．研究概略

初めに：

学校検尿を初めとする健診事業での尿検査（検尿）は、腎疾患の早期発見、早期治療に役立ち、腎不全の減少に寄与してきた。しかし、有所見者の中から重篤な疾患が発見される割合は低く、効果が実感しにくいのも事実である。

目的：

小児の検尿で異常を指摘されたことを契機に発見された、重篤な疾患や治療が必要な疾患の実態を明らかにする。

方法：

検尿異常を指摘され、精査目的で山形大学医学部附属病院小児科外来（当科外来）を受診した患者のうち、精密検査として腎生検を受け、腎疾患が発見された症例につき検討する。

これにより、発見された腎疾患の種類、治療の有無、経過・予後を把握する。

結果：

2018 年～2022 年の 5 年間に検尿異常を契機に当科外来を受診した患者のうち、腎生検を施行した症例につき検討した。検討期間内に腎生検を受けた症例中、検尿異常を契機とするものは 7 例（3 歳児検尿 1 例、学校検尿 6 例）であった。検討期間中に腎生検を受けた症例数の総計は 30 例であった。男 1 例、女 6 例、腎生検時の平均年齢は 10.1 歳（3.4～13.5 歳）であった。診断は IgA 腎症 3 例、巣状分節性糸球体硬化症 1 例、微小変化群 1 例、尿細管間質性腎炎（TINU 症候群） 1 例、慢性腎炎症候群 1 例であった。全例で薬物療法が開始され尿所見の改善傾向が認められた。また、腎機能は保持され現時点で末期腎不全に進行した症例は認めていない。

考察：

3 歳児検尿および学校検尿を契機に当科を受診し、精査が必要な症例に対しては腎生検が行われ、全身症状を呈する前に治療導入することができていた。全例で薬物治療への反応がみられ、末期腎不全に進行した症例は現時点では存在しない。しかし長期予後は楽観できない症例も存在するため、今後も慎重な経過観察が必要である。検尿で異常を指摘された症例の中に少数ながら重篤な疾患や稀な腎泌尿器疾患が存在した。腎疾患の早期発見・早期治療のために尿検査によるスクリーニングは重要であるが、有病率など結果を十分に検討し、疾患が発見された症例については長期の経過観察を継続する必要がある。